

【事業実績】

1 大学ミュージアム活用のための各種行事

(1)啓発事業 ①実行委員会の開催

コロナ禍における連携館相互の交流については、6月からメールリストを設けて、自由に情報交換できるようにした。感染症拡大の収束を期待し、対面で実行委員会を開催できる時期を待っていたが、当面の開催は難しいと判断し、メールによる実行委員会を3回開催した。

ア 第1回実行委員会(メール開催) 実施日時:令和2(2020)年9月11日(金)

イ 第2回実行委員会(メール開催) 実施日時:令和2(2020)年11月10日(火)

ウ 第3回実行委員会(メール開催) 実施日時:令和3(2021)年1月27日(水)

[フェイスブックでの情報発信]

かんさい・大学ミュージアムネットワークとして設けたフェイスブックを使って、情報発信を行った。

2 関西における文化遺産の検証

(1)近代遺産の発掘と活用 ①寄贈資料を引き継ぐ～SPレコード～(Zoomによる座談会)

開催日:2020年11月21日(土)13:30～16:00

参加者:55名(一般参加者48名(申込み55名)、実行委員会スタッフ7名)

参加費:無料(事前申込制) 収録場所:大阪芸術大学 放送学科テレビスタジオ

大阪音楽大学楽器資料館と大阪芸術大学博物館、関西大学博物館は、コロナ禍の状況に鑑み、大阪芸術大学放送学科および同テレビ事務室の協力と歴史街道推進協議会の後援を得て、Web会議システムによる座談会を大阪芸術大学放送学科のテレビスタジオで開催した。当初、事務局では不慣れなオンライン発信に不安を感じていたが、大阪芸術大学の全面的な協力を得て技術的援助を受けることができ、高度な発信につながった



座談会打合せ風景

まず第1部の座談会では、「SPレコード・コレクションの来歴と譲渡の経緯」として、大阪音楽大学楽器資料館から受贈資料の説明があり、続いて大阪芸術大学博物館での「白壁コレクション」と関西大学博物館での「松本コレクション」のそれぞれの整理状況について報告があった。今年度に予定していたほとんどの事業はコロナ禍により取り止めとなったが、両館では、感染対策を施してSPレコードの整理作業を6月から段階的に進めており、この座談会の開催につながった。



SPレコード整理作業風景(左:大阪芸術大学博物館、中央・右:関西大学博物館)

第2部では、オーディオ史研究者で元大阪芸術大学博物館事務長・学芸員の柳知明氏による「SPレコードのデータベース作成の意義と整理作業への助言実例報告」、音楽評論家 毛利真人氏による「国内外SPレコード関連データベースの現況とプラットフォーム統一の必要性」、そして九州大学総合研究博物館専門研究員 大久保真利子氏による「SPレコードを受け継ぎ活用すること—所蔵館調査と九州大学総合研究博物館での取り組みをもとに—」と題した事例報告が行われた。座談会では、著作権の問題もありSPレコードの実演をはずして整理方法やデータベース化にテーマを絞ったところ、申込者の約8割がSPレコードを所蔵する博物館園等の社会教育施設からであり、想定以上にSPレコードの取り扱いに関心を持つ館園が多いことが分かった。参加者からは、SPレコードをはじめとする音源資料には、書籍や雑誌と比べて、全国的、世界的な共同データベースがないことや、メタデータを作成するための基準等が必要など、専門的知見と同時に日常的な収集や整理作業に必要な基礎的な情報を求める声が寄せられた。現状は個人に依っている技術や知識を共有したことで一定の基準を示すことができ、今後は、各館園での整理作業が推進されるきっかけとなる効果が期待できる。同じ課題を持つ館園が集うことができた成果は大きい。



座談会収録風景(於:大阪芸術大学テレビスタジオ)

また、大学ミュージアムが連携している当実行委員会では、人材育成の観点から、これまでも学生の参画を積極的に推進してきたが、今回は、コロナ禍により学生が大学に入構できない期間が続いたため、ほとんどの作業は、スタッフの知人や卒業生に頼らざるを得なかった。しかしながら、短い期間ではあったが、アルバイトがなくなって困っている関西大学の学生をワークスタディとして募り、SPレコードの整理作業に従事してもらったり(一部自己資金)、Web 会議システムを使った座談会の収録本番のカメラ係として大阪芸術大学の学生に活躍してもらったりと、将来学芸員を希望する学生ではないものの、学生協力を得たことを記録しておきたい。せっかく入学した大学に夏まで一度も足を踏み入れることができなかった新入生は、大学に博物館があることに驚き、知識として持っていたも触れたことのないSPレコードの重さやもろさを体感した。当時の文化や記憶に触れてもらい、作業終了日には一緒に蓄音機がかなでるSPレコードを鑑賞し、博物館資料やSPレコードという「モノ」を媒介に時間と場所を共有することで、博物館が本来持つ意義を再確認する機会となった。

社会的な交流や情報交換の遮断、低減に直面した教育機関の一組織である大学ミュージアムが、ニュー・ノーマル下で連携活性化事業を推進できたことは、かんさい・大学ミュージアムネットワークとして「つなぎ、つなげ、つながった」相互連携の成果そのものであった。



座談会広報用ポスター